



天守復元CG

↑「鳥取城修覆願図」本丸部分

天守が焼失する直前の1680年(延宝8)に描かれた城内絵図の本丸部分である。右の月見櫓よりかなり大きく天守が描かれる。天守の屋根のみ色が茶色で塗り分けられていることから柿葺か板葺であったと推測される。窓は古写真に写る山麓の二の丸三重櫓と同じく連続した出格子窓であった。櫓の向きは南北方向とも見てとれるが、現状天守台石垣の規模から東西方向であった。天守の陰になるために付櫓は描かれていない。(鳥取県立博物館蔵)



鳥取城天守復元 CG

二重天守としては破格の大きさの天守。全体的にすんぐりした形であり、やはり上に望楼部が載った姿を想像してしまう。(金澤雄記復元 株式会社エスCG制作)

三重から二重になった天守

山頂の天守は、山名豊国の時代の1573年(天正1)に天神山城の三重天守が移築されたのを起源とするが、絵図などがなく詳細は不明である。秀吉の兵糧攻め(渴殺)の際も、この三重天守がそびえていたことになる。

その後、池田長吉により1602年(慶長7)から行われた城の大改修で、三重天守は二重天守に改められた。風雪の厳しい山陰で山頂の天守は傷みやすかったため二重にしたという。この二重天守は1692年(元禄5)に落雷で焼失してしまい、以後再建されず、鳥取城は天守のないまま幕末を迎えた。

望楼型天守の基部が残った二重天守

天守は早々に失われたため、古写真はおろか詳細な指図や文字史料もないが、少ない資料から天守を推定復元してみよう。

現存する天守台石垣は、初重が東西約10間(1間=約2m、約20m)で南北の長辺が約10間、短辺が約8間の不等辺四角形に歪んだ平面である。まず天守の一階平面がどのような形であったかを考えると、石垣いっぱい天守が建てられた場合、非常に歪んだ平面をもつ二重天守になってしまう。そのため、天守台上部に空地を作った方形の面をもつ

形の整った層塔型の二重天守が建てられた可能性もあ
次に天守へ登る入口であるが、天守台には石段の痕
がないため、付櫓から入って天守の一階に上る構造に
ていたはずである。天守台東側に付櫓の石垣らしき石
残っており、絵図には描かれていないが、付櫓をとま
複合式天守であったと考えられる。

なお現状天守台石垣を見ると、中央北西寄りに南北
×東西4間、深さ8尺(1尺=約30cm、約2.4m)ほどの
がある。ただし天守台石垣には本丸の平地からこの穴
入るための切込みがなく、犬山城や姫路城の天守のよ
穴蔵を通して天守に登る構造になっていない。つまり
の入口は付櫓で、この穴蔵は天守一階床からはしご
入る食糧もしくは火薬などの貯蔵庫であったと思われる。

さて、会津若松城のように、滅築の結果、天守と付櫓が
離れてしまっている例外的な天守もあるが、基本は天守
櫓は接続しているものである。天守の東側にある付櫓に
するため天守台南東側に天守が寄っていたとすると、天
外側に空地ができて外に対する監視ができない、空地が
の足場になりうるなど、防備上望ましくない。とするとや
守台いっぱい天守が建っていたと考えるほうが無難であ
る。

以上より天守初重規模は約10間四方程度の不等辺四
角形となり、初重規模からすれば五重天守を築くことも可
ほどの大きな規模である。そこにわずか二重の天守が
建てていた。二重天守といふとかなり珍しく思うが、例え
ば江戸に現存する備中松山城天守の事例がある。特に